

# 海士

季は	地は	シテ	子方	後	前
秋	讃岐	龍女	前に同じ		

ワキ	房前従者
子方	房前大臣
立衆	隨行者
シテ	海人女

「出づるぞ名残三日月の。く。都の西にいそがん。

サシ 「天地の開けし恵み久かたの。天の児屋根の御ゆづ

り。

大臣 「房前の大臣とは我事なり。さてもみづからが御母  
は。讃州志度の浦。房崎と申す所にて。むなし  
くなり給ひぬと。承りて候へば。いそぎ彼所に下  
り。追善をもなさばやと思ひ候。

「ならはぬ旅に奈良阪や。かへり三笠の山かくす。

春の霞ぞ恨めしき。

「三笠山。今ぞ榮えん此岸の。く。南の海にいそ  
がんと。ゆけば程なく津の国。こや日の本のは  
じめなる。淡路のわたり末ちかく。鳴門の沖に音  
するは。とまりさだめぬ海士小舟。く。

「御急ぎ候ふ程に。是は早讃州志度の浦に御着きに  
て御座候。又あれを見れば男女の差別は知らず人  
一人來り候。彼者を御待ち有て。此所の謂を委し

く御尋ねあらうするにて候。

シテ一聲  
「海士の刈る。藻に住む虫にあらねども。われから  
濡らす袂かな。」

サシ  
「是は讃州志度の浦。寺近けれども心なき。あまのゝ  
里の海人にて候。げにや名におふ伊勢をの海士は  
夕波の。うちとの山の月を待ち。浜荻の風に秋を  
知る。また須磨の海士人は塩木にも。若木の桜を  
折りもちて。春を忘れぬたよりもあるに。此浦に  
咲く草もなし。何をみるめ刈らうよ。」

歌  
「刈らでも運ぶ浜川の。く。  
塩海かけて流れ蘆の。  
世を渡る業なれば。心なしともいひがたき。あま  
のゝ里に帰らん。く。

ワキ詞  
「いかに是なる女。おことは此浦の海士にてあるか。」

シテ詞  
「さん候此浦のかづきの海士にて候。」

ワキ  
「かづきの海士ならば。あの水底のみるめを刈りて

参らせ候へ。

シテ  
「痛はしや旅づかれ。飢にのぞませ給ふかや。わが  
住む里と申すに。かほどいやしき田舎のはてにて。  
不思議や雲の上人を。みるめ召され候へ。刈るま  
でもなし此みるめを召され候へ。

ワキ  
「いや／＼さやうの為にてはなし。あの水底の月を  
御覧するに。みるめ繁りて障りとなれば。刈りの  
けよとの御諫なり。

シテ  
「さては月のため刈りのけよとの御諫かや。昔もさ  
るためしあり。明珠をこの沖にて龍宮へ取られし  
を。かづきあげしも此浦の。

地  
「天みつ月も満潮の。／＼。みるめをいざや刈らう  
よ。

ワキ詞  
「しばらく。何と明珠をかづきあげしも此浦の海士  
にてあると申すか。

シテ詞  
「さん候此浦の海士にて候。またあれなる里をばあ

まのゝ里と申して。かの海士人の住み給ひし在所にて候。又是なる島は彼珠を取り上げ始めて見そめしによつて。新しき珠島と書いて。新珠島と申し候。

ワキ 「さて其玉の名をば何と申しけるぞ。

シテ 「玉中に釈迦の像まします。いづかたより拝み奉れども同じ面なるによつて。面向向ふに背かずと書いて。面向不背の珠と申し候。

ワキ 「かほどの宝を何とてか。漢朝よりも渡しけるぞ。

シテ 「今の大臣淡海公の御妹は。もろこし高宗皇帝の後に立たせ給ふ。されば其御氏寺なればとて。興福寺へ三つの宝を渡さるゝ。華原磐泗浜石。面向不背の玉。二つの宝は京着し。明珠はこの沖にて龍宮へ取られしを。大臣御身をやつし此浦に下り給ひ。いやしき海士乙女と契りをこめ。ひとりの御子を設く。いまの房前の大臣是なり。

大臣「やあ是こそ房崎の大臣よ。あらなつかしの海士人

や。なほく語り候へ。

シテ「あら何ともなや。今まではよその事とこそ思ひつるに。さては御身の上にて候ひけるぞやあら便なや候。

大臣「みづから大臣の御子と生れ。恵み開けし藤の門。されども心にかゝる事は。此身残りて母知らず。

地「ある時傍臣かたりて曰く。忝くも御母は。讚州

志度の浦。房崎のあまり申せば恐ありとて言葉を残す。さては卑しき海士の子。賤の女の腹に宿りけるぞや。

地「よしそれとても筈木に。く。しばし宿るも月の光り。雨露の恩にあらずやと。思へば尋ね来りたり。あらなつかしの海士人やと。御涙を流し給へば。

シテ「げに心なき海士衣。

地

「さらでもぬらす我袖を。重ねてしをれとや。かた  
じけなの御事や。かゝる貴人の。いやしき海士の  
胎内に。やどり給ふも一世ならず。たとへば日月  
の。潦にうつりて。光陰を増す如くなり。われら  
も其海士の。子孫と答へ申さんは。事もおろかや  
我君の。ゆかりに似たり紫の。藤咲く門の口を閉  
ぢて。いはじや水鳥の。御主の名をば朽たすまじ。  
「とてもの事に彼玉を潜きあげし所を。御前にてそ

ワキ詞

と学うで御目にかけ候へ。

シテ詞

「さらばそと学うで御目にかけ候ふべし。其時海士  
人申すやう。もし此玉を取り得たらば。此御子を  
世継の御位になし給へと申しゝかば。子細あらじ  
と領掌し給ふ。さては我子ゆゑに捨てん命。露ほ  
ども惜しからじと。千尋の縄を腰につけ。もし此  
玉を取り得たらば。此縄を動かすべし。其時人々  
力を添へ。引きあげ給へと約束し。一つの利剣を

抜きもつて。

地

「かの海底に飛び入れば。空は一つに雲の波。煙の波を凌ぎつゝ。海漫々と分け入りて。直下と見れども底もなく。辺も知らぬ海底に。そもそも神変はいさ知らず。取り得ん事は不定なり。かくて龍宮にいたりて。宮中を見れば其高さ。三十丈の玉塔に。かの玉を籠めおき。香花を供へ守護神は。八龍並み居たり。其外悪魚鰐の口。のがれがたしや我命。さすが恩愛の。故郷の方ぞ恋しき。あの波のあなたにぞ。我子はあるらん。父大臣もおはすらん。さるにても此まゝに。別れはてなん悲しさよと。涙ぐみて立ちしが。又思ひ切りて手を合はせ。

南無や志度寺の觀音薩埵の。力を合はせてたび給へとて。大悲の利劍を額にあて。龍宮の中に飛び入れば。左右へばつとぞ退いたりける。其ひまに宝珠を盗みとつて。逃げんとすれば守護神おつか

く。かねてたくみし事なれば。持ちたる剣を取り直し。乳の下をかき切り玉を押しこめ。剣を捨て、ぞ伏したりける。龍宮のならひに死人を忌めば。あたりに近づく悪龍なし。約束の縄をうごかせば。人々よろこび引きあげたりけり。玉は知らず海士人は。海上に浮び出でたり。

シテ  
「かくて浮びは出でたれども。悪龍のわざと見えて。五体もつゞかず朱になりたり。玉もいたづらにな

り。主も空しくなりけるよと。大臣なげき給ふ。其時息の下より申すやう。我乳のあたりを御覧ぜとあり。げにも剣のあたりたる跡あり。其なかより光明赫奕たる玉を取りいだす。さてこそ御身も約束のごとく。此浦の名によせて。房前の大臣とは申せ。今は何をかつゝむべき。是こそ御身の。母海士人の幽靈よ。

地  
「此筆の跡を御覧じて。不審を為さで弔へや。今は

帰らんあだ波の。夜こそ契れ夢人の。明けて悔しき浦島が。親子のちぎり朝潮の。波の底に沈みけり。立つ波の下に入りにけり。(中入)

ワキ詞  
「いかに申し上げ候。あまりに不思議なる御事にて候ふほどに。御手跡を披いて御覧ぜられうずるにて候。

大臣  
「さては亡母の手跡かと。ひらきて見れば。魂黄壤に去つて一十三年。骸を白沙に埋んで日月の算を経。冥路昏々たり。我を弔ふ人なし。君孝行たらばわが冥闇をたすけよ。げにそれよりは十三年。

地  
「さては疑ふ所なし。いざ弔はん此寺の。志ある手向草。花の蓮の妙経。色々の善をなし給ふ。く。  
地  
「寂寞無人声。

後ジテ  
「あらありがたの御弔ひやな。此御経にひかれて。五逆の達多は天王記別を蒙り。八歳の龍女は。南

方無垢世界に生を受くる。なほく轉読し給ふべし。

地「深達罪福相。遍照於十方。

シテ「微妙淨法身。具相三十二。

地「以八十種好。

シテ「用壯嚴法身。

地「天人所戴仰。龍人咸恭敬。あらありがたの御経や  
な。」  
(早舞)

シテ「今此経の徳用にて。

地「今此経の徳用にて。天龍八部。人与非人。皆遙見  
彼。龍女成仏。さてこそ讚州志度寺と号し。毎  
年八講朝暮の勤行。仏法繁昌の靈地となるも。此  
孝養と承る。